
一匹狼 ～番外編～

原木野徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一匹狼 〜番外編〜

【Nコード】

N0405E

【作者名】

原木野徹也

【あらすじ】

生まれた時からいつも一匹の狼。群れなんて、大嫌いだよ。前作、「一匹狼」の番外編というか、スピノフというか……。一応リボーンのFFになってますが、名前は一切出てきません。先に「一匹狼」のほうをお読みください。

むかしむかしあるところに、一匹の狼がいました。

その狼はいつもたった一匹で歩き、一匹でエモノを狩り、一匹でそれを食べ、やっぱりたった一匹で眠っていました。

だけれど、そのことを哀しいと思ったことはありません。

もっと、ずっと前から、狼はひとりぼっちだったからです。

自分でエモノを狩れるようになったころには、すでに母親も父親もいませんでした。

どこかではぐれたのか、自分を捨てて行ったのか、それとも死んでしまったのか、狼は知りません。

それくらい前から狼はずっと一匹で生きてきたのです。

一匹でいることが当たり前で、それ以外のことなんて知りません。

それなのに、どうして『哀しい』なんて思えるでしょう。

それに、狼は強かったのです。

たった一匹でも生きていけるほど、人間達に捕まることがないほど、狼は強かったのです。

そんな意味のない感情、邪魔になるだけの想いは、狼には必要な

いのです。

それでも時々、身体のどこかにぽっかりと穴があいたような、冷たい風が吹き抜けるような、そう感じることはありません。

森の中で、山の中で、ほかの狼を見かけたときです。

沢山の狼が、沢山の親子が、たくさんの兄弟たちが群れていて、見ているだけでとても暖かでした。

『自分もあの中に紛れ込めたら……』

最初のころは、そう思うこともありました。

でも、狼はそんなことをしませんでした。

狼は、知っていたからです。

誰かに教わったわけではないけれど、ずっと昔から、生まれた時から知っていたこと。

狼は、ほかの土地なわばりから来た、自分たちと違う狼は群れの中に受け入れないのです。

同じ種族ではあるけれど、決して仲間ではない。

それが自分たち狼。

分かっている、分かっている。それが決まり。

自分はひとりだ。ひとりであるしかない。だって、仲間などいないのだから。

近づいたところで威嚇され、吼えられ、追い出される。

無意味なことは、する必要などないのです。

どうせ、いつまでたっても狼は一匹にいるしかないのでから。

だから、狼は群れませんでした。

狼は群れることができませんでした。

狼は群れが嫌いになりました。

狼はいつも一匹でした。

群れなんて自分には必要ない。

自分は強いんだ。

他狼^{たにん}の力を借りずとも生きていける。

実際に、今までそうやって生きてきた。

そう、自分は群れないからこそ、これだけ強いんだ。

だから、群れてるやつらは弱い。

弱い奴らに興味はない。

弱い奴らはすぐ消えていく。

弱いやつをかばい、また弱い奴が消えていく。

少しでもその現象を抑えるため、またたくさんの群れを作る。

だから、弱い奴らは決まって群れているんだ。

自分だけは群れない。

だって、群れるのは嫌いだ。

群れてるやつらなんて大嫌いだ。

群れだらけのこんな世界、大嫌いだ。

だから、消してしまおう。

大嫌いな弱い群れなんて、強い自分の前に存在してはいけない。

だから、消そう。

すべての群れを、咬み殺してしまおう。

自分ならそれができる。

それだけの力を持っている。

それだけ、自分は強いんだ。

自分の前で群れることは許さない。

それから、狼はずっと一匹ひとりでした。

狼は、沢山の狼の敵でした。

狼は、沢山の狼の脅威でした。

同じように沢山の狼は、狼の敵でした。

そして、同じように沢山の狼は、狼の脅威だったのでしょ

う。
だからこそ沢山の狼を咬み殺し、自分の強さを確かめるように、
生きていたのです。

「だいじょうぶ」

いつか、誰かがそう言いました。

「だいじょうぶ。俺たちはいつでもここにいます。追いついたりしません」

どこかの誰かが、狼に向かってそう言いました。

たしか、とても小さな草食動物。

周りに幾匹かの群れを連れて、恐れることなく狼に向かって言いました。

それは、確かに小さな草食動物でした。

見た目通りにとても弱くて、叩けばすぐにでも倒れてしまいそうなのに、急にとっても強い狼になる、よく分からない奴。

「お前の力があるんだ」

そう言ったのは、その草食動物の隣りに立つ、まだ小さな小さな狼です。

狼が強いと認める、たったひとつの存在。

「今すぐじゃなくてもいいんです。準備ができたときでも、ふと気が変わったときでも、いつでも好きな時に入ってきてください」

また、草食動物が言いました。

狼は草食動物から、ふいつと顔をそむけました。

群れは嫌いだ。

群れるなんてまっぴら御免だよ。

だけど……。

君を見ているのは、面白いかもしれない。

「……ふん」

それが、狼の答えでした。

その答えに草食動物は苦笑して、「そうですか」と言いました。
ではまた、と別れのあいさつをし、去っていきました。

……君の傍にいるのも、悪くないかもしれない。

……君となら、一緒にいても大丈夫かもしれない。

だけど、今はその時じゃないよ。

草食動物と一緒にいるには、まだいろいろと準備がいるようです。

それに、群れが嫌いなのは変わりません。

まだ、いろいろと、あるのです。

それに、どうやら草食動物は勘違いをしているようでした。

仲間に……、入りたいわけじゃ、ないんだけどね。

群れるのはやっぱり嫌いです。許せません。

でも、たまにはいいかな……、と思うようになりました。

狼は今日も一匹です。

いつも通り、群れを見つけたら咬み殺します。

いつも群れてる弱い奴らは嫌いです。

でも、前のように自分の前からすべて消えてしまえばいい、とは思わなくなりました。

だって、そんなことになってしまったら、草食動物あのみに会えなくなってしまう。

淋しがりやなくせに意地っ張りの狼は、今日もやっぱり一匹です。

（後書き）

雲雀さんの生い立ち妄想。

雲雀の親がどんな人が想像できなかったので、「いなくていんじゃないの〜」という感じで、こんな所に使ってしまった。

執筆開始から三時間。

私史上最速で書きあげたので、誤字脱字は気にしないでください……！

………何が書きたかったんでしょうね？（訊くな）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0405e/>

一匹狼 ～番外編～

2010年10月9日04時08分発行